

研修レポート

文学部コミュニケーション文化学科 専任講師
竹部 成崇

はじめに

今回の研修では、2024年4月から2025年3月の間、台湾に滞在し、国立台湾大学理学部心理学科に所属した。国立台湾大学理学部心理学科には、心理学を専門とする専任教員が25名以上も在籍している。研修者の専門である社会心理学を主領域とする教員の中には、研修者と同じく集団内過程・集団間関係に関心を持ち、様々な手法を用いた独創的な研究を行い、著名な雑誌に多数の論文を掲載させている李怡青教授がいる。また、社会心理学以外にも、産業組織心理学・発達心理学・実験心理学・社会神経科学・心理統計学など様々な専門の教員が在籍しており、実験設備や議論・相談の場が充実している。以上のように、研修者の専門である社会心理学の研究を遂行し、心理学全般の知識を深める上で理想的な環境が整っているため、国立台湾大学理学部心理学科を研修先として選定した。

研修成果①：李教授との共同研究の実施

今回、李教授と共同で遂行した研究は、「資源不足が内集団の範囲を狭めるという現象が、非意識下でも生じるか」を検討するものであった。より具体的には、漢族台湾人参加者に資源不足あるいは資源充足を描写するスライドショーを見せた後、内集団成員（i.e., 漢族台湾人）の顔画像と外集団成員（i.e., 東南アジア人）の顔画像を平均化することで作成した複数の合成顔を見せ、それらを内集団成員（i.e., 漢人）と外集団成員（i.e., 東南アジア人）のどちらとする方が的確か判断してもらうという実験を行った。参加者には、前半の課題は記憶課題、後半の課題は分類課題と称し、両者は関係のない課題と説明した。実際に、2つの課題の関連を指摘した参加者はいなかった。そのため、もし資源不足を描写するスライドショーを見た参加者の方が、資源充足を描写するスライドショーを見た参加者よりも、合成顔を外集団成員（i.e., 東南アジア人）と判断する回数が多ければ、それは人が資源不足を知覚すると非意識的に内集団の範囲を狭めることを示す証拠となるものであった。

この実験は、実は研修者自身が考案したものではない。元々アメリカで、白人参加者を対象に行われたものであった（Rodeheffer et al., 2012）。すなわち、白人参加者に資源不足あるいは資源充足を描写するスライドショーを見せた後、内集団成員（i.e., 白人）の顔画像と外集団成員（i.e., 黒人）の顔画像を平均化することで作成した複数の合成顔を見せ、それらを内集団成員（i.e., 白人）と外集団成員（i.e., 黒人）のどちらとする方が的確か判断してもらうという実験が、すでに行われていた。結果は研究者らの予測通りで、資源不足を描写するスライドショーを見た白人の方が、合成顔を黒人と判断する回数が有意に多かった。

Rodeheffer et al. (2012) の知見は、資源不足に伴う内集団の狭隘化が態度や行動より前の知覚という段階で非意識的に生じることを示す、理論的にも社会的にもインパクトのあるものであった。しかし、この現象はアメリカ以外では検証されておらず、また、アメリカで行われた追試研究では、結果は再現されなかった。そこで研修者は、数年前に日本で追試研究を行った (Takebe et al., 2023)。具体的には、日本人参加者 (i.e., 東アジア人) に資源不足あるいは資源充足を描写するスライドショーを見せた後、内集団成員である日本人 (i.e., 東アジア人) の顔画像と外集団成員であるインド人 (i.e., 南アジア人) の顔画像を平均化することで作成した複数の合成顔を見せ、それらを内集団成員 (i.e., 東アジア人) と外集団成員 (i.e., 南アジア人) のどちらとする方が的確か判断してもらうという実験を行った。研修者は元研究の約 10 倍のサンプルサイズで事前登録をした上で追試研究を実施したが、元研究の結果は再現されなかった。

しかし、結果が再現されなかった理由として、元研究の知見が真実ではないということ以外に、①日本は長らく経済が停滞しているため、資源不足を描写するスライドショーの効果が弱かった、②日本は人種的多様性が極端に低いいため、効果がうまく検出されなかった、という可能性が考えられた。そこで今回、日本よりも経済状況が悪くなく、歴史的に人種的多様性が高い台湾において、追試研究を行うこととした。

国外において実験を実施することは初めてであったため、その国の歴史や肌感覚を知った上での外集団成員の設定 (i.e., 何人を外集団成員とするか)、合成する元となる顔画像の入手、台湾人参加者に合わせたスライドショーの修正、中国語での調査ページの作成、倫理審査、参加者のリクルートなど、多くの困難があったが、無事、2つの予備調査 (i.e., スライドショーおよび合成顔の適切性を確認する調査) と、1つの本実験を完遂することができた。実験の結果は、やはり元研究の結果は再現されなかったというものであった (図 1)。しかし、実験刺激の適切さを予備調査で確認した上で、元研究の 10 倍以上のサンプルサイズで行った実験であるため、科学的には重要な知見となるものであった。

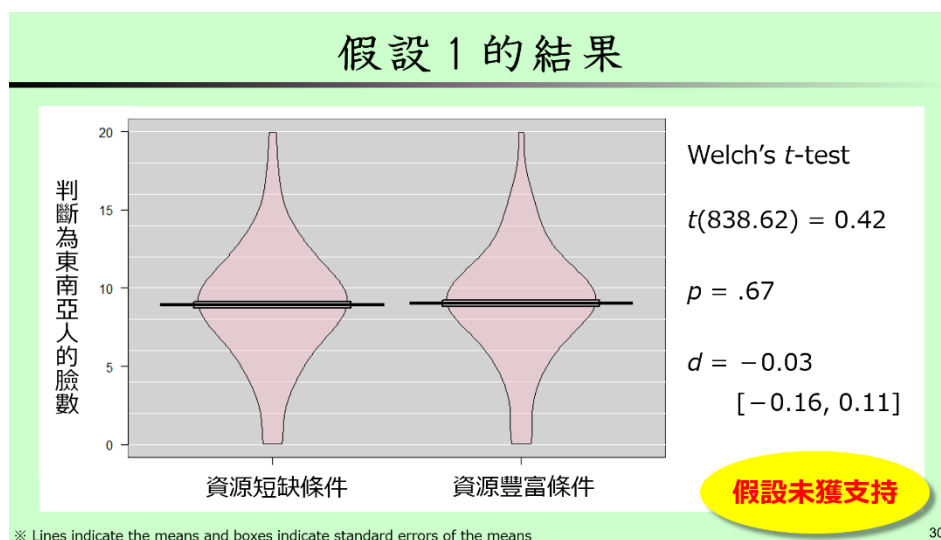


図 1. 実験結果報告のミーティングで使用したスライドの 1 枚

当初は上記の結果をそのまままとめて論文として投稿する予定であった。結果が再現されなかったという追試研究であっても、「再現性の危機」以降、そういった研究を掲載する雑誌は一定数あり、どこかの国際誌には掲載されるだろうと思っていたためである。また、無理矢理有意な結果を出そうとする行為は QRP (Questionable Research Practices) であり、再現性の低い知見を世に蔓延らせる原因になってしまうためでもある。しかし、李教授には「より良い雑誌に載せるには、“再現されなかった”以上の知見が必要だ。もっと分析をして、それを見つける必要がある」と言われた。当初、研修者はこの発言に驚いた。「QRP を推奨しているのか？」と勘違いをしてしまったためである。しかし後に、そうではないことを知った。発言の意図は単に「良い雑誌に掲載されるにはより貢献度の高い知見が必要である」「そのために必死で知恵を絞らなければいけない」ということだったのである。探索的分析は探索的分析として明記した上で、帰無仮説検定は行わずに信頼区間等で議論すれば、QRP には当たらない。であるならば、元研究と同じ分析だけを行い、非有意な結果だけを報告する研究より、「このような場合には効果が強くなるかもしれない」という示唆がある研究の方が、科学への貢献度は高いだろう。李教授はこのような努力を怠ってはいけないと言っていたのである。これは、昨今の研究潮流を悪い意味で踏まえて、「ラクな」研究をしてしまっていた申請者にとっては厳しい指摘であったが、李教授は常にこうした態度で研究に望んでいるため、著名な雑誌に何本もの論文を掲載することができているのだろう。こうした体験は世界的な研究者と共同研究を行ったからこそ得られたものであり、良い刺激となった。

研修成果②：今後の研究の土台作り

当初より、今回の研修は「これまでの成果を形にする機会」というより、「今後の研究の土台を作る機会」と考えていた。実際、研修者はこれまで国外研究者との接点が一切なかったが、今回の訪台により、李教授との繋がりができた。また、実際に台湾においてデータ収集をする方法を学ぶことができた。例えば、台湾の心理学者は Facebook を使って参加者募集することが多いこと、より広く台湾人からデータ収集したい場合には、台湾大学の政治学者・経済学者などの社会科学の教員が管理する研究参加者データベース（図 2）を使用することなどを知った。また、台湾大学で倫理審査を受けることは手続き上難しいが、台湾心理学会も独自の研究倫理規定を定めており、その内容は日本心理学会の倫理規程と同じく APA (American Psychological Association) の倫理規定に準拠したものであるため、それらを参照しながら説明すれば、研修者が実施するようなリスクのほとんどない社会心理学実験は、本学で倫理審査を受けられることも知ることができた。

台湾でデータ収集するには、上記のような手続きについて理解するだけでなく、台湾人の母語である中国語を理解することも重要である。翻訳作業は外部委託できると思われがちだが、心理学のように教示が重要な意味を持つ場合は、その翻訳が適切なものかどうか、しっかりと研究者自身が確認する必要があるためである。そのため、研修期間中に、國立台灣大學文學院語文中心中國語文組において 2 学期間、中国語を学んだ。授業は 1 日 3 時間、



図 2. 台湾大学の社会科学分野の教員が管理する参加者データベースの HP

週 5 日で、予習・復習に要する時間もかなり多かったが、そのおかげで中級の入り口程度までは習得することができた。まだまだ十分な語学力とは言い難いが、2 学期間学んだ後には、大学院生の協力を得て作成した（※実質的にはほとんど大学院生に作成してもらった）中国語の調査ページを、かなりの程度理解できるようになった。引き続き学習を続けることで、自分自身で調査ページを作成できるようになるかもしれない。語学学習は基礎が大事と言われるため、基礎を現地でみっちり学ぶことができたことは、この研修の大きな収穫の 1 つであった。

以上に加えて、台湾でデータ収集するには、台湾文化を理解することも必要である。台湾人はどのような価値観や習慣を持っていて、何を重視しているのかなどを理解した上で、実験方法を考えたり、調査ページを作成したりする必要があるためである。上述した国立台湾大學文學院語文中心中國語文組の中国語の授業では、語学だけではなく、台湾文化についても学ぶ機会が多かった。また、研修期間中は、発達心理学が専門の雷庚玲准教授が、自身が保有する研究室を研修者に貸してくれており、研修者はそこで日常的に研究業務を行っていたのだが、2025 年夏に博士課程を修了予定の雷研究室の院生である鄭澈氏が同室であったため、彼からも多くの台湾文化を学んだ。彼自身も日本に非常に興味があり、将来的には日本で職を探すことも検討していたため、言語交換をしながら、日本と台湾の文化について非常に多くのことを議論した。彼は博士課程終了後、日本と台湾の文化比較研究を行いたいとのことだったため、将来的には共同研究を行う可能性も生まれた。

研修成果③：学生として授業を受けるという経験

上述の通り、国立台湾大學文學院語文中心中國語文組において 2 学期間、中国語の授業を受講したのだが、大学教員になってからは（当然のことではあるが）授業を行う側を担うば

かりで受ける側になったことはなかったため、これは正規の学生として授業を受けたという意味でも、非常に貴重な経験であった。国立台湾大學文學院語文中心中國語文組では学期ごとに担当教員が変わるため、2人の異なる先生の授業を受けることができた。教える内容は全教員共通しており、基本的な教材（i.e., 教科書やワークブック）も同じであるが、何を重視するか、どのように教えるかは、教員によって様々であった。学生という立場で参加できたため、他の学生と教員について話す機会もあったが、同じ授業を受けていても、学生によって教員に対する評価は様々であることを知り、改めて、「教育方法にただ1つの正解はない」ということを感じた。また、「Kahoot!」という研修者が知らなかったシステム（図3）を用いてゲーム感覚で学びを促進する教員もいた。総じて、この経験は国外研修に行ったからこそ得られたものであり、改めて自身の教育について振り返り、改善する良い機会となった。

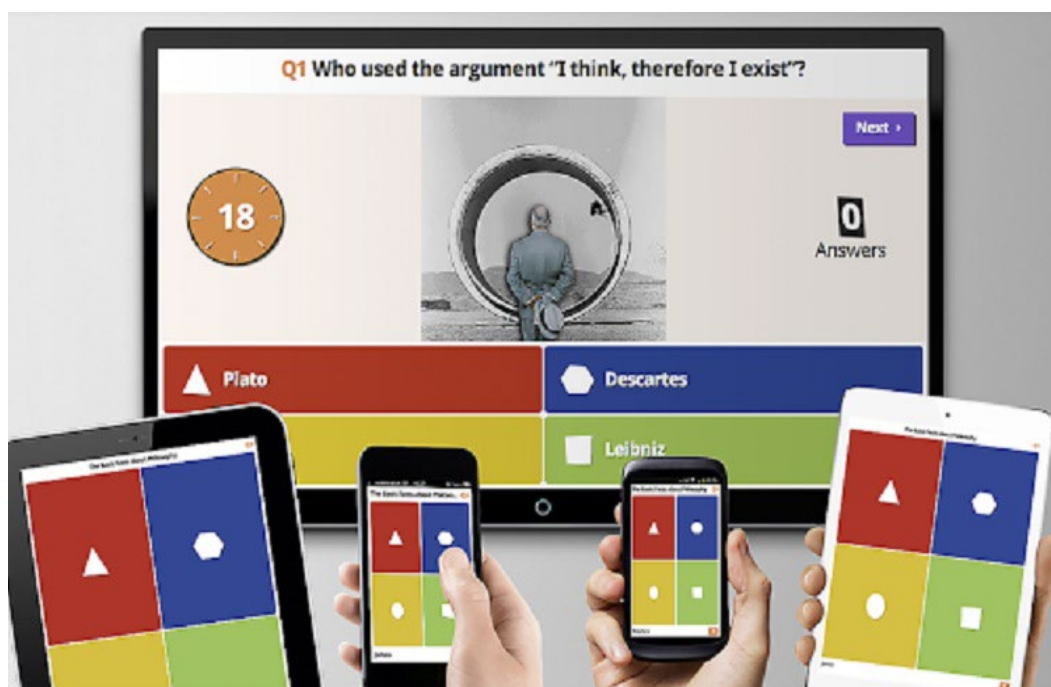


図3. Kahoot! の使用イメージ（Kahoot の HP より）

研修成果④：投稿中論文の採択

訪台直前に、国際誌に1本の論文を投稿していた。その結果が研修期間中に返ってきたのだが、結果は Major Revision であり、無理難題を提案する査読コメントではないものの、非常に細かな点まで指摘がなされていたり、2人の査読者で意見が異なる部分もあったりし、容易に対応できるものではなかった。しかし、多大な時間と労力をかけることでなんとか期限内に再投稿することができ、2度目の査読結果は軽微な修正のみの Minor Revision となり、最終的に無事採択されることができた（Takebe et al., 2025）。

研修成果⑤：未発表研究の論文投稿・採択

本学に着任する前に実施していた研究で、時間がないために未だに論文化できていなかった研究があった。大学院生のときに学部生の卒論指導として学部生と共同で行った研究であったが、日本では貴重なデータ・知見であるため、また、日本で社会心理学を学ぶ学部生の今後の卒論研究の参考になると思われるため、今回の研修を機に、日本語で論文化することとした。2名の査読者のうち、1名は採択判断であったものの、もう1名はかなりの修正を要する Major Revision であった。しかし、丁寧に1つ1つのコメントに対応したことで、再投稿後は Minor Revision となり、最終的に採択されることができた（竹部, 2024）。

研修成果⑥：1章を分担執筆した書籍の出版

以前にある雑誌に掲載された論文が、その雑誌において優秀論文賞を受賞していた関係で、その雑誌上で発表された論文のいくつかをまとめて書籍化した本に収録されることとなった（竹部, 2025）。これは今回特に何か新たな作業をしたわけではないが、研修期間中の業績であるため、念のため、報告しておく。

研修成果⑦：新規研究の実施

研修期間の終盤、研究費と時間に少し余裕があったため、当初は予定していなかった新たな研究を実施した。具体的には、現在進行させている研究の終了後（3,4年後）に本格的に取り組む予定の研究のパイロット実験を、日本人を対象にオンラインで実施した。結果は仮説通りの部分も仮説と反する部分もあり、手応えと同時に改善案のきっかけを掴むことのできるものであった。李教授にも簡単に説明したところ、強い関心を示しており、今後の進展があり次第共有してほしいと言われ、これもひとつの自信となった。

研修成果⑧：その他

上記の他に、年に一度行われる台湾心理学会に参加したり、李研究室の研究ミーティングに参加したりし、台湾における心理学および社会心理学の状況や教育方法について、学びを得ることができた。また、研修期間の前半は、研修者と同じく日本から来ていた琉球大学の中尾達馬准教授（専門：発達心理学）も同室であり、日々、研究に関する情報交換・議論を行うことができた。心理学という大きな括りでは共通しているものの、専門は発達心理学と社会心理学で全く異なるため、日本にいればこのように多くの議論をする関係になることはなかったと思われる。さらに、台湾の國立中正大學で専任教員として勤務し、世界的な研究者として走り始めている藤原健准教授と話をする機会もあった。藤原准教授とは直接の面識はなかったため、また、藤原准教授が日本の学会に参加することは、最近はほとんどないため、今回の研修を機に話をすることができたことは貴重な経験であった。藤原准教授のこれまでの研究人生や、世界で活躍する研究者となるための心構えなどについて、知ることができた。

おわりに

総じて、今回の研修では、普段の学院での教員生活では得られない貴重な経験を積むことができたと考えている。改めて、このような機会を与えてくださった学院、および今回の研修に行くことをお認めくださった文学部、特にコミュニケーション文化学科の教員の方々に感謝の意を表したい。今回の研修で得た学びを、今後の自身の教育・研究に積極的に生かしていきたい。